5 未来への展望

川崎市では今年度、「基本的考え方」に基づくこれまでの取り組みの検証を行っているが、その中である有識者からいただいた「ソーシャルデザインとは、『行政が社会をデザインする』のではなく、『社会によるデザイン』である」というコメントが印象的であった。事業プロセス自体が従来とは大きく異なり、各区一律、行政主導の協働スタイルではなく、多様な主体のつながりとその相互作用による「市民創発」を目指しており、行政はその一員の立ち位置で参加している。行政主導の進め方ではないので、期待する方向にいかないことや、時間を要することもあるかもしれない。しかしながら、市民自治の視点で考えるとき、市民が主体となりつつ、行政も一緒に悩み、考えるプロセスこそが、地域でのつながりや市民自治の力が育まれ、市民一人ひとりがお互いに支え合う互助のまちづくりの広がりにつながることが期待できる。そのために、行政も一員として伴走し、機動的に必要な施策を展開する、といった“絶妙な”関わり方が求められている。そのようなことを意識しながら、「基本的考え方」においてコミュニティの将来像を描いた「希望のシナリオ」の実現に向けて今後も取り組んでいきたい。

コラム

50年前の川崎市役所にタイムスリップ
山　雅之さんに聞く②

昭和46（1971）年に入庁された山さんに編集部が当時のお話を聞きました。

山　雅之さん

― 50年前の執務環境はいかがでしたか。

（山） 私は生活保護の担当でしたが、以前、川崎市警があった頃の建物が転用されて事務所として使われていました。木造庁舎は古くて暗く、歩くと床がギシギシと音がして、窓は木製のため隙間風が入ってきました。自席には灰皿が置かれ、タバコを吸いながら仕事をするのが当たり前でした。当時の上司に掛け合って換気扇を入れた時には随分恨まれました（笑）。入庁当時は女性も少なく、私が勤務していた分庁舎のトイレは水洗ではなく、男女共用でした。また、土曜日は「半ドン」と言って半日勤務、半日休みでした。午後はみんなで野球をして、そのまま飲みに行く、というのが習慣化していました。一方で、課長には専用の部屋があり、係長は背もたれが高く白いカバーが掛かっている大臣のようなイスに座っているなど、役職者はずいぶん偉かったですね（笑）。

― 仕事道具はどのようなものを使っていましたか。

（山） 入庁時は文書や記録を万年筆か液体インクをつけたペンで書いていました。その後、ボールペンの使用が普及していきました。また、保護費の計算にはそろばんを使っていました。電卓が導入されたのを機に計算が早くなり、パソコンが普及し劇的に仕事の仕方が変わりました。

電卓を使い始めた当初は電卓がはじき出した数字が信じられずに、そろばんを打って確認したりしていました。

― 市役所周辺の風景はいかがでしたか。

（山） 川崎と言えば労働者の街で、かつては道路のところどころで酒盛りをする人たちもいたほどです。川崎もずいぶん変わったなぁと心底思います。私には、その変化のシンボルが新本庁舎に見えますね。世の中はデジタル化が進みますが、職員の方には本を読んだり生身の体験も大事にしてほしいと願っています。

また、キレイな執務室で勤務できることが一番うれしいので、勤務状況を改善してくれたすべての人に感謝したいです。